

占領期に出版された絵本

- 『占領期検閲児童書目録』中巻を手がかりに -

PICTURE BOOKS PUBLISHED IN THE POST-WAR OCCUPATION PERIOD: OCCUPATION PERIOD CENSORED CHILDREN'S BOOKS CATALOGUE, CLUES FROM PART II

谷 暎子
Eiko Tani

ABSTRACT

"Occupation Period Censored Children's Books Catalogue, Part II" was published in America in September, 1997, by the University of Maryland, College Park, Library. In this catalogue is contained bibliographical information on 1,584 titles of the picture books of the Prange Collection.

The Prange collection is the treasure of Japanese post-war history documents. It has all the published material which was censored by GHQ · SCAP from October, 1945, to October, 1949.

The purpose of this research is to clarify the outline and characteristics of picture books published during the Occupation Period. Also, an attempt is made to look into the distinctive qualities of the published books and research papers during the same period in Japan.

はじめに

占領期の児童出版物については、その全体像が明らかにされないまま現在に至っている。原資料の散逸が研究を困難なものにしているといえよう。そうした意味でも、ブランゲ文庫所蔵の児童出版物は日本の児童文学・文化研究を進める上で貴重な資料群として注目されている。『占領期検閲児童書目録』中巻(注1)は、1997年9月にメリーランド大学カレッジパーク図書館から刊行された。この目録にはブランゲ文庫所蔵の絵本1,584タイトルの書誌情報が収められている。ブランゲ文庫に所蔵されている児童書は約8,000冊といわれているが、目録・中巻

は昨年刊行された『占領期検閲児童書目録』上巻・児童読物の統編として刊行されたものである。目録・上巻については拙文を参照していただきたい。(注2)

ブランゲ文庫では現在、所蔵新聞の永久保存の仕事が行われている。所蔵資料の永久保存の仕事は、ブランゲ文庫の責任者であった村上寿世さんの精力的な努力で進められていたが、1997年6月病気で急逝された。『占領期検閲児童書目録』中巻は、精魂を傾けて資料の整理、永久保存にあたっておられた村上さんを追悼する意味を込めて、予定より早く刊行されたものである。

筆者は1995年に7ヵ月間メリーランド大学・

ブランゲ文庫に滞在し、児童書の整理と書誌情報、検閲情報の入力を担当する機会を得た。筆者の滞在中は所蔵雑誌、新聞の永久保存の作業のため文庫は閉館中であり、調査・研究することはできなかった。この小論では、『占領期検閲児童書目録』中巻を手がかりに、占領期に出版された絵本の概要と特徴を明らかにしたい。あわせて、この期の絵本について記録されている年鑑、雑誌の論文などからも特徴をさぐってみたいと考える。

1. 戦後史資料の宝庫・ブランゲ文庫

ブランゲ文庫はアメリカ合衆国・州立メリーランド大学・マッケルデン図書館にある。文庫の正式な名称はGordon W. Prange Collection & Archiveという。州立メリーランド大学の歴史学教授であったブランゲ博士の功績を称えて、1978年に命名されたものである。ブランゲ文庫には、1945年10月から1949年10月まで検閲を受けるため検閲局に納入された出版物が、所蔵されている。日本では既に散逸してしまったものが多く、戦後史資料の宝庫として注目されてきた。

ブランゲ博士は、1938年にメリーランド大学に歴史学の講師として就任。大学在職中の1945年から46年に来日し、GHQ・SCAPの統計局で仕事をし、その後、GHQ・SCAP参謀二部のウイロビー少将に請われて再び来日。参謀二部の歴史部主任を経て後に部長となった人である。『マッカーサー太平洋戦争報告書』の編纂者、『トラトラトラ』の著者としても知られている。

ブランゲ博士は、1949年になって同じ参謀二部の検閲局にあった検閲済みの出版物に着目した。歴史学者であった博士は、これらの出版物には日本・日本人の生活、思想などが映し出されている貴重な歴史資料であると考えたからで

ある。それらの資料をメリーランド大学に譲り受けたい旨、ウイロビー少将に申し出たという。資料をめぐっての争奪戦もあったというが、1949年12月、州立メリーランド大学へ譲渡されることに決定。1950年1月から、500の木箱に詰められた出版物が船便でアメリカに向けて送られた。しかし、メリーランド大学に収められた後、この木箱が開けられたのは1962年になってからのことだったという。資料が整理されるまでには、大学の事情で更に長い時間を要したが、1963年から6年間で13,000冊がカタログ化された。仙花紙など粗悪な紙に印刷された資料は、50年を経て傷みが激しく自壊が進んでいた。1992年からは文庫を閉館にして、雑誌、新聞の永久保存の作業が集中的に行われている。ブランゲ文庫に所蔵されている資料は多種多様で新聞、雑誌、単行本、楽譜、報道写真、パンフレットなどに及ぶ。

雑誌約13,000種のマイクロ化は、1992年4月から州立メリーランド大学と日本の国立国会図書館の共同事業として実施され、4年の歳月をかけて完成。現在は、国立国会図書館の憲政資料室でマイクロフィッシュを閲覧することができる。雑誌資料群には児童雑誌はもちろんのこと、職場の文芸誌や校友会誌など非営利目的の雑誌も含まれていて、当時の日本を知る上で貴重な資料となっている。

出版物の中でも特に自壊が激しいのは新聞である。ブランゲ文庫に所蔵されているのは児童新聞、地方新聞を含む約18,000紙で、既に散逸してしまい日本ではみることでできない貴重なものも多い。1996年からマイクロ化が始まり、98年には終了の予定と聞く。出版物の中でも新聞が一番先に処分されやすい。特に児童新聞は地元の図書館にも所蔵されていないものが多いので、占領期の子ども文化を知る貴重な資料として閲覧できる日が待たれる。

所蔵単行本は約70,000冊で、学術書、文芸書

占領期に出版された絵本

から講談本、実用書まであらゆる分野に及ぶ。このうち15,000冊は既にカタログ化されていたが、残りは1994年夏から整理が始まっている。前述したように単行本のうち約8,000冊の児童書は、1995年の4月から整理が始まり、96年の9月に『占領期検閲児童書目録』上巻・児童読物と、97年9月に『占領期検閲児童書目録』中巻・絵本が刊行された。なお、学校教育関係の図書は1986年から整理が行われ、約10,000冊が国立教育研究所のデータベースに入っているという。

2. 出版物の検閲

敗戦後、占領軍はマスメディアの徹底した検閲制度を施した。検閲の対象は新聞、雑誌などの出版物はもちろんのこと、放送、映画などのメディアや電信電話、手紙などの通信手段にまで及んだ。占領軍はこれらのメディアから情報を収集し、同時に言論を統制した。検閲制度は、1945年10月から49年10月までの4年間続いた。検閲の基準となったのは「日本出版法」、いわゆるプレスコードと呼ばれるもので、次のように記されている。

「日本に出版の自由を確立するために」作られたのが日本出版法で、「出版を制限するものでなく、寧ろ日本の出版機関を教育し、出版の自由の責任と重要性を示そうとするものである。」とあり、具体的には次のような10カ条が示されている。

- 1 報導は嚴重に事實に基かねばならない。
- 2 直接にせよ間接にせよ公安を妨ぐる様な記事を掲載してはならない。
- 3 連合国に就いての虚偽又は破壊的批評を掲載してはならない。
- 4 連合国占領軍に就いて破壊的批評や占領軍に対して不信、又は怨恨を招くような記事を

掲載してはならない。

- 5 公式に発表されない限り、連合軍隊の動静を掲載してはならない。
- 6 報導記事は事實に記し、記者の意見は少しも加てはならない。
- 7 報導記事は宣伝価値を持たせる様に色づけしてはならない。
- 8 さして重要でない報導記事を誇張したり、宣伝の意味をつけたりしてはならない。
- 9 報導記事は関心ある事實又は詳報を省略してゆがめる様なことをしてはならない。
- 10 新聞編輯に當てて宣伝のためにする目的をもって必要以上に重要性を報導記事に付与してはならない。(原文のまま)

検閲に例外はなく児童出版物も当然、検閲の対象であった。検閲は三つの地区にあった民間検閲局で行われていた。第1地区は東京都、第2地区は大阪市、第3地区は福岡市で、1948年の10月からは第4地区として札幌市に民間検閲局が置かれた。検閲局には出版物2部と、出版物の名称、出版社、出版人の名称や住所、発行部数などを記した文書も提出することになっていた。

3. 『占領期検閲児童書目録』中巻にみる絵本の概要

出版点数

目録に掲載されているのは、4年間の検閲期間中に日本全国で出版された1,584冊の絵本である。表1は出版年度別の内訳を半期ごとに示したものである。

表1 年度別出版点数

年度	点数	内 訳
1945	6	上半期 1
		下半期 5
1946	283	上半期 183
		下半期 100
1947	342	上半期 176
		下半期 166
1948	478	上半期 250
		下半期 228
1949	462	上半期 272
		下半期 190
不明	13	13
計	1,584	1,584

『出版年鑑』によると敗戦直前には「戦火による被害の昂まるのに比例して、出版機能は次第に停頓し、昭和20年8月には「1ヶ月間に、絵本が1点出版されたに過ぎないという状態」(注3)だったという。

表1を見ると、翌46年から年々、絵本出版も盛んになっていくことが数字からも読み取れる。『出版年鑑』によると戦前・1943年に出版された絵本は342冊なので、この水準に戻るのは、1947年になってからであることがわかる。

内容別の出版点数

表2は、出版された絵本を内容別に分類したものである。目録にある書名から行ったので正確さには欠けるが、およその傾向を知ることができるので試みた。

動植物、乗物絵本などいわゆる、“ものの絵本”が全体の三分の一を占め、次いで童話絵本、生活絵本がそれぞれ四分の一を占めていることがわかる。

表2 内容別点数

種 類	点 数
も の の 絵 本	約590
生 活 絵 本	約380
童 話 絵 本	約410
科 学 絵 本	約 80
童 謡 絵 本	約 15
マ ン ガ 絵 本	約 5
そ の 他	約 94

出版地別点数

出版地別の出版数を示したのが表3である。絵本の68%は関東、主に東京で出版されている。戦火で出版能力の9割を失ったといわれている東京での出版であった。次いで近畿の29%で、大阪、京都での出版、北海道の2%と続く。児童読物の場合は中部、中国などでの出版も見られたが、絵本の場合は上記以外での出版はほとんどみられない。

表3 出版地別点数

出 版 地	点 数
北 海 道	34
東 北	4
関 東	1,072
中 部	4
近 畿	464
九 州	2
不 明	3
計	1,584

出版社

絵本出版を手がけていた出版社は338社にのぼる。その4割の133社が、1種だけの出版であることを考えると、絵本の出版を手がけていたのは小出版社であることがわかる。群を抜いて出版数の多い出版社は、二葉書房の97冊である。出版数が20以上の出版社をあげると次のようになる。児童読物の場合は東京の出版社の占

占領期に出版された絵本

める割合が大きかったが、絵本の場合は以下の
ように東京と大阪で二分している。

・二葉書房（東京）	97
・昭和出版社株式会社（大阪）	54
・光洋出版株式会社（大阪）	44
・トモブック社（東京）	39
・東山書房（京都）	34
・株式会社児童図書出版社	33
・錦城社（大阪）	32
・榎本書店（大阪）	29
・綱島書店（東京）	25
・株式会社ひばり書房（東京）	24
・株式会社春江堂（東京）	24
・森の子供社（東京）	23
・幸文堂書房（大阪）	22
・二葉書店（東京）	22
・永光社（大阪）	21
・保育社（大阪）	21

上記の出版社の中で、戦前から絵本を出版していたのは、二葉書房、森の子供社、春江堂の3社で、大半が戦後の新興出版社であることがわかる。

著者

目録に記載されている著者(文と絵)は761名、企画、編集部など団体名は12である。著者名(文、絵とも)が記載されていないものが24冊。画家が記載されていないもの4冊。文・作者が記載されていないものが258冊である。表紙、奥付には画家名のみ記載で、文を誰が書いたのかを判断することが難しい。作品の多い順に画家名、作家名をあげると次ぎのようである。

画家	・藤沢 龍雄	41
	・小山 泰治	40
	・長谷川露二	39
	・安井小弥太	38
	・黒崎 義介	36
	・林 義雄	35

	・上田 三郎	28
	・武井 武雄	26
	・鈴木 寿雄	26
	・古屋 白羊	22
作家	・西田 稔	39
	・奈街 三郎	18
	・船木 枳郎	17
	・小春久一郎	17
	・土家由岐雄	13
	・柴野 民三	11

画家、作家とも戦前から活躍していた人たちばかりで、複数の出版社から絵本を出している。出版社が急激に増えたことを考えると、名のある人に依頼が集中したためと考えられよう。

判型、頁数

判型はB 5が1,408冊で約9割を占め、次いでB 6が97冊である。数は少ないがB 4, B 7, A 4, A 5, A 6を合わせて40冊、変形判が23種で39冊ある。裁ちぎれを活用したような判型もあり用紙不足を思わせるような絵本づくりである。

1,584冊の絵本の頁数は27種類あり、少ないもので6頁、多いもので132頁である。約6割が12頁の絵本で878冊、次いで16頁400冊、20頁が135冊、8頁が41冊の順になっている。頁数が少ない理由の一つは用紙が不足していたこと、もう一つは前述したように“ものの絵本”が多いことにもよるのではないかと。

4. 占領期に出版された絵本について

占領期の絵本について当時を知る手がかりとして参考にした報告、調査、論述などは下記の通りである。

- ・「書籍部門 1年史・児童」『出版年鑑』昭和22年版23年版 復刻版・文泉堂出版株式会社 1978年

- ・松葉重庸「児童読物」 『児童文化概論』
巖松堂書店 1959年
- ・竹田俊雄「幼児の環境としての絵本」 『児
童心理』 第1巻第8号 1947年
- ・竹田俊雄「生活絵本いろいろ」 『生活学校』
第3巻第2号 復刻版・教育資料出版 1980
年
- ・竹田俊雄「絵本展望」 『生活学校』 第3
巻第7号 復刻版・教育資料出版会 1980年

『出版年鑑』の解説

『出版年鑑』には雑誌、書籍など、その年度の出版状況の紹介がある。絵本は書籍部門の「児童」の項に、部分的に扱われている。

昭和21年の児童書については「昨年はんらんしていた粗悪な書籍や絵本は姿をけし、ようやく本らしい本がこの年のはじめ頃から町にあらわれるようになってきた。」とある。絵本のテーマとしては教育絵本に次いで漫画絵本が目につき「露骨な商業主義的な出版物も多い。」し、ものの絵本は重版も多く「特筆するほどの新企画はあまりみられない。」物語絵本では「世界名作物語が断然その首位を占めている」が、「秀れた作品もあるが片々たる駄作も少なくない。」と解説されている。(注4)

翌22年は「乗り物、幼児の生活、物語を描いた作品が多く」、物語絵本では「海外の作品を扱ったものが相当にある。」こと。前年に比べ

て「企画に於て着落きを示し、内容印刷効果に於いてその飛躍が感じられる。」(注5)と評している。

松葉重庸の調査・研究

松葉重庸の調査報告は、敗戦直後の絵本を知る資料として興味深い。昭和20年11月から翌年8月までに出版された絵本102冊について調べたものである。(注6) 目録には同時期に出版された絵本167冊が記載されているので、松葉の調査対象は当時出版された絵本のおよそ6割くらいといえよう。

絵本の判型ではB5判が最も多く、頁数では16頁、次いで12頁が多という。内容についての分類は、表4に示すように戦前・昭和16年と比較して興味深い。幼児の生活をテーマにした絵本が最上位で、童話絵本、動物、植物などの“ものの絵本”の順になっている。表にはあらわれていないが、「戦後は外国語が使用されはじめ102冊中37冊(36%)に及んでいる。」と指摘している。(注7)

出版社では戦後、新しく絵本出版を手がけた無名の出版社が多いこと。画家の過半数は戦前から絵本画家として親しまれている人が多いが、紙質や印刷の悪さなどもあって絵は戦前より低下しているし、文案家の努力も不足していて戦後10年の絵本は「不備だらけであったことはいなめない。」(注8)と言及している。

占領期に出版された絵本

表4 松葉重庸・絵本の分類

分 類	戦前	戦後	分 類	戦前	戦後
自 然 物	1冊	18冊	歴 史	0	3
植 物	1	10	伝 記	0	49
動 物	4	51	昔 噺	4	86
乗 物	9	103	童 話	21	69
社 会 生 活	6	18	童 謡	2	7
幼 児 生 活	23	125	科 学	1	14
玩 具 道 具	5	14	教 育	11	53
地 理 風 俗	1	12	軍 事	0	84
				104	714

*戦前（昭和16）、
戦後（昭和20～21）

竹田俊雄の調査・研究

当時、絵本の収集・調査研究を活発に行っていた竹田俊雄は、愛育研究所の研究員であった。竹田は敗戦直後から執筆時までには収集した絵本410冊について、雑誌『児童心理』昭和22年8月号の論文「幼児の環境としての絵本」で報告している。目録からみると、竹田の調査対象は同時期に出版された絵本の8割くらいにあた

る。

内容による分類は表5の通りで、「もっとも多く出版されているのは童話絵本で全体の3割を占め、ついで漫画絵本がおよそ2割を占めている。児童生活を描いた絵本や乗物絵本、動物絵本がこれにつき他はきわめて少数である。」（注9）と報告している。

表5 竹田俊雄・絵本の分類

部 門	冊数	%	部 門	冊数	%
児 童 生 活	43	10.5	語 学	29	7.1
乗 物	39	9.5	童 話	124	30.2
動 植 物	31	7.6	詩	6	2.0
科 学	10	2.4	漫 画	80	19.5
社会（歴史、地理）	19	4.6	雑	24	5.9
工 作	3	0.7	計	410	100.0

この論文で興味深いのは、数量的な面のみでなく表6のように、410冊の絵本について「A、B、Cの3段階に私が品等した結果」が掲載されていることである。竹田は四つの条件すなわち、①表現の美しいこと、②表現がこどもに理解出来るものであること、③こどもの生活を導くものであること、④社会的あるいは自然的な環境を知らせるものであることの基準に照らし、Aは好ましい絵本、Bはまず水準にある絵

本、Cは不適當な絵本としている。その結果、「詩、社会、工作、動植物の絵本には比較的優良のものが多く、漫画や雑多な内容の絵本には排除すべきものが多く、児童生活をえがいた絵本や科学絵本には比較的無難なもの、B級のものが多数」（注10）を占めていること。童話絵本については、創作絵本は比較的A級、日本古典童話の絵本はC級のものが多く、外国童話の絵本は平均的にはB級程度であると評している。

表6 竹田俊雄・絵本の評価

部 門	A	B	C		A	B	C
児童生活	20.9%	44.2%	34.9%	語 学	27.6%	27.6%	44.8%
乗 物	25.6	38.3	41.0	童 謡	17.7	41.1	44.1
動 植 物	32.3	25.8	41.9	詩	37.5	50.0	12.5
科 学	20.0	80.0	0.0	漫 画	11.2	22.5	66.3
社 会	36.8	42.1	21.1	雑	0.0	45.8	54.2
工 作	33.3	66.7	0.0	総 計	19.8	36.6	43.6

竹田の「絵本展望－昭和23年度上半期－」は、『生活学校』第3巻第7号に掲載されている。昭和23年1月から6月までに出版され、小売店で売られていた絵本86冊の調査結果である。86冊の絵本は51の出版社から出されたもので、うち42社は東京、6社は大阪である。絵を描いたのは57名の画家、画家名のないもの2種、共著3種となっている。内容的には「童話絵本がおよそ全体の四分の一、児童生活を描いた絵本と漫画絵本とが、それぞれ五分の一を占め、乗物絵本や動植物絵本がこれについて多数出版され自然科学的事象（動物以外）や、社会生活を描写した絵本は極めて少数であり、終戦直後出した語学絵本は全く姿を見せない。」とし、前年の410冊の絵本の調査結果と「主な傾向としては著しい差異はない」と述べている。(注11)

竹田はこの論文でも、絵本の質的水準について「企画の妥当性や表現の芸術性」から評価し、結果をA、B、Cに分類している。「Aは現代の代表的絵本として推されてよい優秀さをもっている」もの、「Cは文化性が低劣で、子どものための出版物として存在理由を見出し得ないとされる」もの、Bは「両者の中間で、絵本としての水準に達していると判定されるもの」(注12)として、基準見本としての絵本名をあげている。結果はAが9種(10.5%)、Bは37種(43.0%)、Cは40種(46.5%)で前回の410冊と比較してみると「優秀な絵本があまり現れなくなって、水準あるいはそれ以下のものが増加し

ている」と述べている。さらに生活絵本、童話絵本、科学絵本など各分野の絵本について、詳細な書評をおこなっていて当時の絵本観を知る上でも貴重な論文である。

おわりに

『占領期検閲児童書目録』中巻から読み取れる情報と、同時期の絵本研究論文などから占領期の絵本出版についてみた。

『出版年鑑』にみるように、敗戦直前は1ヵ月に絵本が1冊出版されたに過ぎない状態であった。思想統制に加えての物資払底、出版の中心であった東京が戦火で出版能力を失ったことなどによる。敗戦後の半年間は、数字で見ると限り(表1)敗戦直前とはほぼ同じ状態が続いている。1946年度から年を追って出版社が増え続け、絵本を手がけるところが多くなっていき338社にのぼる。敗戦後は作れば売れた時代といわれている。欲しくても手にはいらなかった時代が長く続いたのだから、子どもの文化財・絵本への要求がいかに強かったかを知ることができる。もちろん背景に、荒廃した社会に生きる子どもたちに、絵本を手渡したいという大人たちの思いがあったことも確かであろう。しかし、用紙不足のなかで、良心的な出版には優先的に用紙が配給されたこと、他の児童書に比べても絵本は頁数も少なく、作りやすかったことも要

因として考えられよう。

絵本の出版量と質・内容は、必ずしも比例していなかったことが、松葉重庸や竹田俊雄の調査からも読み取れる。実際、目録でも三分の一が「のりもの」「どうぶつ」など、いわゆる“ものの絵本”である。幼児の生活を描いた生活絵本についても、「ただこどもの生活の1カット」を「筆先で作上げた場面を、何ということなしにつづり合わせたもの」が多い（注13）と竹田は指摘している。また、目録の童話絵本約410冊のうち半数は「もたろう」などの日本昔話で、創作は四分の一に過ぎないなど、全体的に安易な絵本づくりを思わせる。目録から内容を読み取ることに限界はあるが、前述した松葉重庸や竹田俊雄の評価（表6）でも裏づけられよう。もちろん優れた創作物語や、『新しい浅草』『新しい銀座』『アメリカの兵隊さん』『マッカサー元帥』など敗戦直後の社会を映した絵本なども見られるので、今後の調査が欠かせない。

ブランゲ文庫所蔵児童書のうち、マンガの目録はまだ刊行されていない。文庫では現在、所蔵全児童書の目録を作成する仕事が続けられている。この目録が刊行されると、占領期の児童書の全体像解明により近づくことができよう。さらに、既にマイクロ化されている児童雑誌と、現在マイクロ化が進められている児童新聞を合わせた占領期の児童出版物研究が期待されている。それらについても合わせて調査を行いたい。

加えて、検閲についての調査・研究も避けて通れない課題である。目録から読み取ることができないが、絵本の場合には検閲を通らなかつたものがあると聞く。また、日本が経験した戦前と戦後の検閲が、児童文学・文化にどのような影響、意味を持ったかの、その検証が十分には行われていないと考えるからである。

注

1. Occupation Period Censored Childrens Books Catalogue Part2 1945-1949
Edited by Hisayo Murakami
Compiled by Eiko Tani
Published by The University of Maryland at College Park Libraries September, 1997
※目録の上巻、中巻とも米国内のみの出版である。
2. 谷暎子「占領期に出版された児童読物－「占領期検閲児童書目録」上巻を手がかりに－」北星学園女子短期大学紀要第33号 1997年
3. 「書籍部門別3年史・厚生・婦人」復刻版『出版年鑑』昭和19年版、20年版、21年版 文泉堂出版株式会社 1978年 26頁
4. 昭和22年「書籍部門別1年史・児童」復刻版『出版年鑑』昭和22年版、昭和23年版 文泉堂出版株式会社 1978年 18頁
5. 昭和23年「書籍部門別1年史・児童」復刻版『出版年鑑』昭和22年版、昭和23年版 文泉堂出版株式会社 1978年 20頁
6. 松葉重庸「絵本の調査」「絵本に於ける問題」第3章児童読物 『児童文化概論』 巖松堂書店 1950年
7. 前掲書「絵本の調査」103頁
8. 前掲書「絵本に於ける問題」105頁
9. 竹田俊雄「幼児の環境としての絵本」『児童心理』第1巻第8号 金子書房 1947年 29頁
10. 前掲書「幼児の環境としての絵本」 30頁
11. 竹田俊雄「絵本展望－昭和23年上半年－」復刻版『生活学校』第3巻第7号 教育史料出版会 1980年 51頁
12. 前掲書「絵本展望－昭和23年上半年－」 52頁
13. 竹田俊雄「生活絵本いろいろ」復刻版『生活学校』第3巻第2号 教育史料出版会

1980年 43頁

参考文献

- 村上寿世「ブランゲ文庫－占領期検閲局に残された日本の出版物」『図書館雑誌』 Vol. 89, No. 8 財団法人日本図書館協会 1995年
日本児童文学者協会『復興期の思想と文学』 偕成社 1979年
永田桂子『絵本観玩具観の変遷』 高文堂出版社 1987年
山本武利『占領期のメディア』 法政大学出版局 1996年